

松 下 幸 之 助 翁 を 語 る

松下翁は、ほんとうにお仕事だけの人でした。

朝の挨拶で「きようは寒いですね」と言っても、「いや、寒いのがいいんや」、

「きようは暑いですね」と言つと、「いや、暑いほうがいいんや」と。

冷房や暖房の器具が売れますからね。

季節は巡ってきたほうがいいと言つのです。——黒田

[今月のゲスト]
鍼 醫

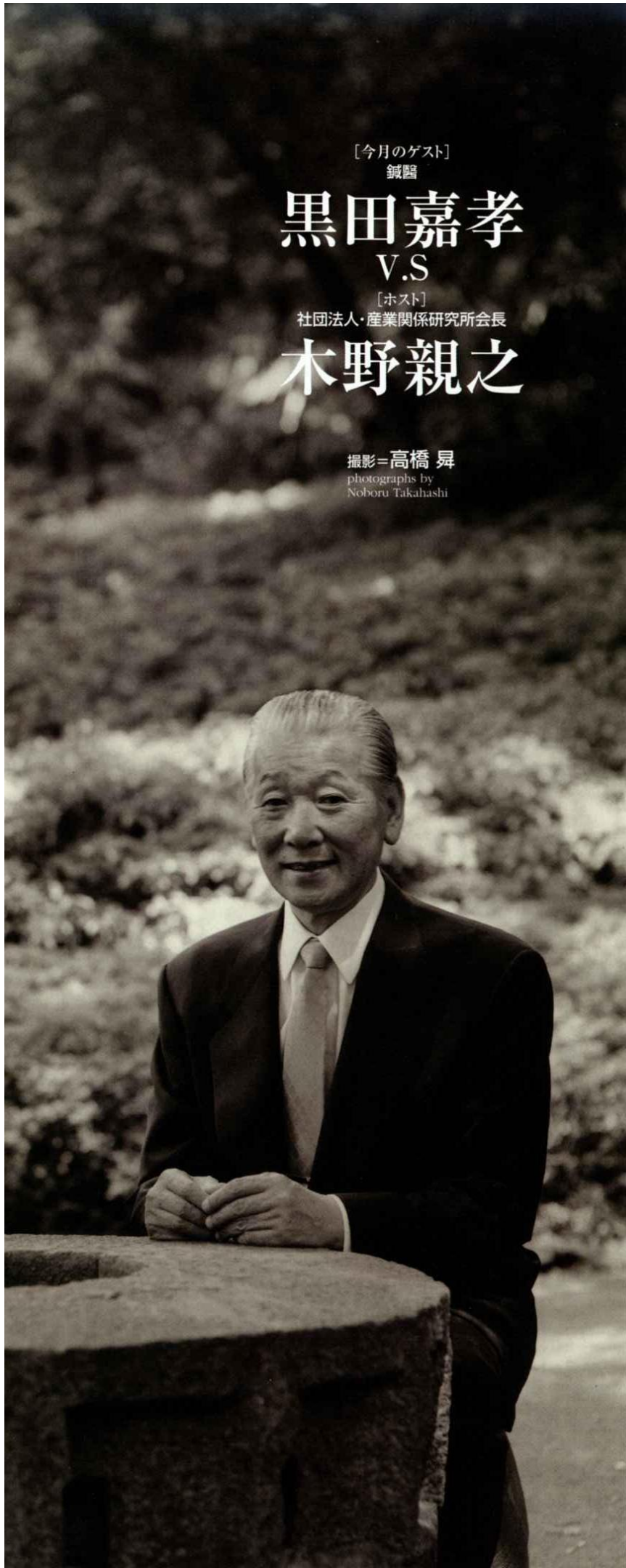
黒田嘉孝
V.S

[ホスト]

社団法人・産業関係研究所会長

木野親之

撮影=高橋 昇
photographs by
Noboru Takahashi



松下幸之助翁との 最初の出会

黒田 松下幸之助翁と私の出会いは、松下翁が75歳、私が30歳ごろでした。松下翁が上京される前に、何となく具合が悪いということ、松下病院にて診察を受けられましたが、特別異常なしとのことでは上京されました。

しかし、どうも具合が悪いと、東京でも3つの病院へ行かれたけれども、結論が出ませんでした。そこで、私のところに往診依頼のご連絡がありまして、「どんなに夜遅くなってもいいから往診をお願いしたい」と電話がありました。伺ったのが夜中の1時半を過ぎておりました。

私はすべて脈で診ていきます。診断のあと、「脳梗塞で、手が少しおかしくなっています。これ以上

お仕事をなさると症状がひどくなりますので、もう一度、松下病院で診てもらってください」とお伝えしました。

翌朝、大阪にお帰りになり診察を受けられましたら、やはり、脳梗塞だということでした。大阪の松下病院の院長以下医師の先生たちを集められ、「なんで鍼の先生がわかるのに、君たちがわからないのか」と、お小言を言われたそうです。

それから、大阪にいてもどうも治療がうまくいかないで先生に診てもらいたいという申し出がございまして、東京でおおよそ1ヵ月、毎日治療させていただきまして、手のほうもすっかりよくなられてお元氣になりました。

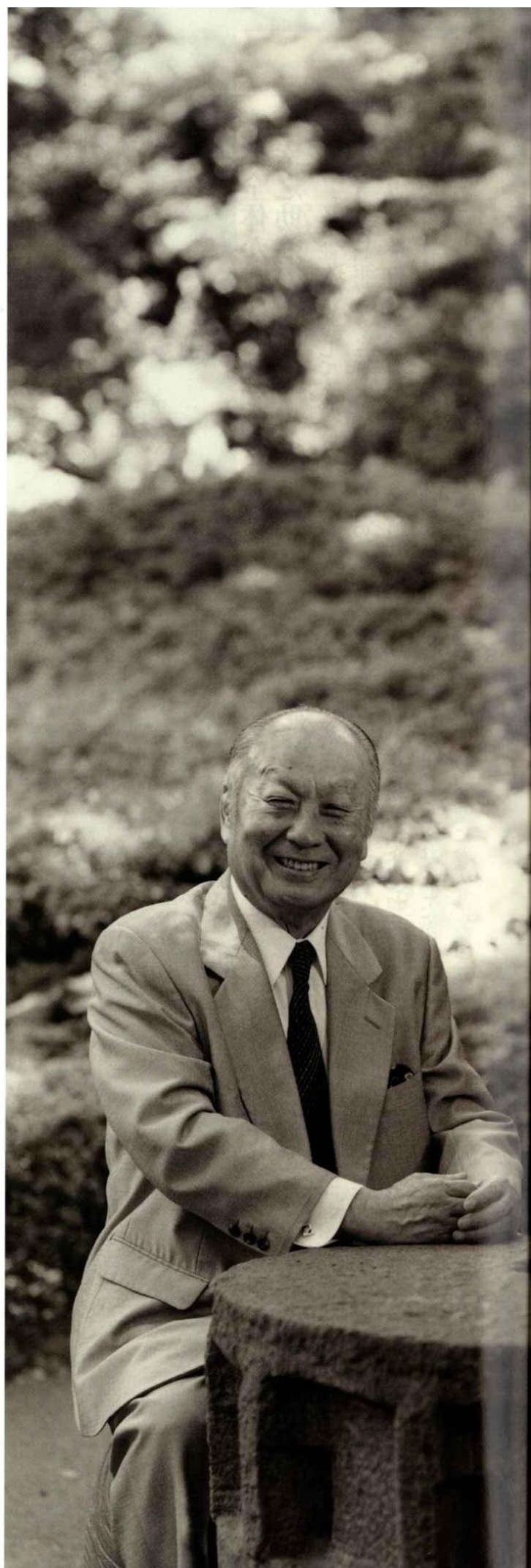
木野 そうですね。お聞きしたところでは、ご飯を食べているときに茶碗を落とされたという…。

黒田 そのときすでに、脳梗塞が起きていたわけですから。

木野 松下創業者は黒田先生をほんとうにご信頼されていました。上京する目的はいろいろあっただろうと思いますが、治療がいちばん大きな目的ではなかったかと思うぐらいに、黒田先生のごころに通われましたね。

黒田 伊藤忠の越後正一社長とお2人で治療にお見えになったとき、越後さんが「松下さんの主治医は誰ですか」とお聞きになりましたら、「僕はこの先生しか主治医はいないのです」と言われたときは、ほんとうに嬉しい気がしました。

吉兆の創業者の湯木さんとも一緒にお見えになられたときも、「松下さんの主治医は誰ですか」と聞かれ（笑）、「いやあ、この先生しか僕はいませ



んで」と…。松下翁は非常に相手の気持ちを喜ばせるといふ面をおもちでした。そのことに感銘いたしました。

木野—それは、お世辞ではなくてご本心から言っておられるのでありがたく感動するんですね。

松下創業者は先生に鍼治療をしていただきながら、やはり仕事が頭から離れないもんですから、よく私は、黒田先生のところへすぐ来るようにと呼び出されました。

黒田—そうでしたねえ。(笑)

木野—松下創業者は、私と一緒に鍼治療を受けながらすぐには寝つかれないので、そばのベッドにいる私に一言、二言、経営の話なされる。それをお聞きして、私は非常に嬉しく、教えられることが多かったことを思い出します。そのうち自然と寝つかれたのを見定めてから、私も安心して休むというようなことでした。ところが、鍼治療が終わってからが大変なんです。ご本人が元気になられますのでね。(笑)

黒田—いちばん叱られましたねえ。(爆笑)

木野—あははは。そうでしたね。

黒田—「木野さんは叱られ上手なんですよ」と、皆さんおっしゃっていました。(笑)

体全体からオーラを出された 幸之助翁のエネルギー

木野—2人並んで治療してもらうときの創業者の経営の話は、ポツポツと優しく、基本的なものの考え方についての素晴らしいお話なんです。そのときは「この経営の大師匠に会えたことは私の人生の宝」と無上の喜びにひたる至福のときでした。

ところが、治療が終わって着替えてネクタイを締め、2人が向かい合い、出されたメロンをいただき終わったら、それからが大変で、現実の経営問題について厳しくお叱りを受ける。そんなことで、いつの間にか黒田先生の治療室が松下創業者の東京の執務室に早変わりするんです。

黒田—非常に激しい面もおもちになっている方ですね。私がそう思ったのは、松下さんの治療を始めて8年目に、松下翁の仕事が忙しく3カ月間治療が空いたことがあるんです。

そのとき、秘書の方から「食べるものも全部出されるし、水物も皆出してしまわれる。これは先生、どういうことですか」という電話があつたので、「それは脳梗塞がまた、脳の下のほうで起きたんです」と説明をしました。

しかし、病院の先生方も病気の結論を出せないでおられた。私は長年の鍼治療の経験から、「それは脳梗塞です」と申しあげましたら、「先生、すぐ大阪に来てください」と言われ、すぐに松下病院へ伺いました。

阪大の医学部の教授など、いろいろな人を連れてきては松下さんを診ていただいたんでしょうね。

それでも結局、結果が出ない。それで、怖い目をされて、「鍼の先生は一言ではつきり結果を出しているのに、君たちは、僕をいろんな先生に診させたのに結論が出せない」と、先生方をものすごい勢いでお怒りになりました。私も恐縮してびびくりしました。それ以降も治療が12年続きました。

木野—優しいだけではないですよ。創業者は、常に真剣勝負で生きておられましたから。

黒田—そうですね。非常にお痩せになつて骨と皮

の方でしたが、体全体からオーラを出されて…。叱るときも、真剣勝負という印象を受けました。ほんとうに湯気が立つくらいエネルギーをもつてらっしゃいました。

木野—松下病院に健康スポーツ用の「美坂式鉄の玉」をお見舞いに持っていましたら、「木野君どうするかね」と言つて、ベッドから下りて教えてほしいと言われるのです。

そこで、私が重い「鉄の玉」を持って、こうするのです、とやってみせると、松下創業者も一所懸命「鉄の玉」を持ちあげられて運動されるのです。そばで見えられたお茶の師匠矢野宗粹先生に、「そんな無茶さして」と叱られたものです。

松下創業者の体を診て いちばん気をつけられたところ

木野—「史上初の1億3000万人が選ぶ日本人が好きな世界の偉人100人を発表する」というテレビ番組がありました。観ておりますと、1番が織田信長、2番が坂本竜馬、3番がエジソン、4番が豊臣秀吉、5番が松下幸之助、6番が徳川家康と続いていくわけです。

いろいろな外国人の名前も後に続いていきますが、松下幸之助のように、我々が身近に感じている近代日本をつくった新しい人はなかなか出てきません。やはり日本人が好きなのは織田信長、竜馬、秀吉、家康で、その秀吉と家康との間に挟まれて松下幸之助創業者が挙がっていました。いまの若い人たちは昔の人を知らないときよく聞きますが、松下幸之助創業者は若い人も含めて人気があるんだなと思つて嬉しかったです。



ゲ ス ト プ ロ フ ィ ー ル

黒田嘉孝

Yoshitaka Kuroda

1940年長崎県島原市生まれ。1964年鍼灸学校卒。1966年中央大学文学部国文科卒。同年ドイツ留学。1971年開業現在にいたる。その間、鍼灸学校講師、経路治療学会講師、1991年臨床研修会設立。現在論文多数。

ところで、黒田先生はいつも創業者の健康を気遣われて、いろいろと心血を注いで、という言葉どおり、一所懸命やっていたいておりましたが、松下創業者の体を診て、いちばん気をつけられたところはどこでしょうか。

黒田—やはり、動脈硬化ですね。

木野—年齢的ということでしょうか。

黒田—そうですね。やはり血管を絶えず若くとか、弾力性のある血管にするというのが最大の目標にやっておりました。

もともと弱い体の方のようでしたが、最後まで頭はしっかりなさっておられました。私は、お亡く

なりになる前の2年半は、毎週大阪へ行っておりました。ほんとうに、お仕事だけの人でした。

私が、朝のご挨拶のとき、「きょうは寒いですね」と言いますと、「いや、寒いのがいいんや」「きょうは暑いですね」と言うと、「いや、暑いほうがいいんや」と。